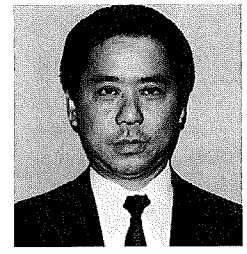


良い農協は「エグゼクティブ」が違おう！
エグゼクティブ農協探訪記

⑧

逆風の中で有機・無農薬栽培に着手 信用は地元から県外にまで広がる



農業評論家
土門 剛

どもん たけし/1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。「省益に走った農水官僚の100日」(中央公論94年3月)、「食管死守で焼け太る農水官僚」(This is 読売94年3月)、「懸案見送られた食管改革」(同94年7月)、「食管制度のあり方に関する調査懇談会」(エコノミスト94年8月)など、農業や農協問題について規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆。主な著書に、94年1月「農林中金の憂鬱」(日経ファイナンス94)、93年10月「市場解放決断の日」(日本経済新聞)、92年11月「農協が倒産する日」(東洋経済新報社)、「穀物メジャー」(共著/家の光協会)、「東京をどうする、日本をどうする」(通産省八幡和男氏と共著/講談社)、「新食糧法で日本のお米はこう変わる」(東洋経済新報社)など。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。

岡山県 岡山市高松農協

〒701-13 岡山県岡山市高松141-1
☎086-287-2501

農協が無農薬、低農薬、有機と安全志向の栽培に取り組むようになったのは、つい最近のことである。それまでは「無農薬や低農薬は農協経営にとって敵である」という偏見が多くの農協関係者の頭を支配していた。「農薬や肥料が売れなくなつたらどうするんだ」という理屈らしい。そんな農協界の偏見がいつぱんに崩れてきたのは、農産物の販売競争が激しくなつてからである。

しかし岡山市高松農協だけは違っていた。農協界で誰も有機や無農薬に見向きもしなかつた頃から、コソコソと安全志向の栽培に取り組んできた。

それをリードしてきたのは、30年以上も農協発展のため粉骨砕身してきた藤井虎雄さんである。農協界で有機・無農薬栽培に取り組んだ元祖といつても決して過言ではないだろう。これに取り組んだのは、山崎豊子さんの『複合汚染』を讀

んだのがきつかけだったというから、年季が入っていることがわかりいただけだろう。

この取り組みが婦人部から始まったこともユニークだったし、販売に際しての目の付けどころも違った。たとえば「無農薬栽培ならアトピー症状の子供にも食べさせられる」とPRしたら大反響があつたという。また藤井さんが取り組んだ運動は、川を守るために合成洗剤を追放するなど、地域の環境保全運動にも拡がっている。

その藤井さんに7、8年ほど前に会つた時、「有機・無農薬栽培に取り組んで以来、その筋から脅迫状が投げ込まれたりしたもんですよ」と語っていたのが、いまでも耳に残っている。「その筋」とは、恐らく農薬や肥料が売れなくなつては困る上部団体のことを指していたのだろう。有機や無農薬は、殉教者の心意気でもなければ取り組めなかつた時代が、ほんの10年ほど前にあつたということだ。それを考えれば、昨今の有機・無農薬、低農薬栽培のブームは今昔の感がありすぎる。

その藤井さんに会うのを楽しみに岡山

市高松農協まで出かけていったのだが、今回は会えずじまいだった。聞けば昨年5月で組合長を退かれたとのこと。現在は藤井さんからバトンタッチを受けた難波義太氏が組合長だ。

難波組合長は農協マンにしては少々異色のキャリアを持つ。近畿農政局で農協検査の仕事に携わつてきた。定年を機に故郷に戻り農協組合長として第2の人生を送ることにしたのだ。

高齢農家の生き甲斐が生む価値

難波組合長のスタートはとでもラッキーだった。就任してわずか10ヵ月後の今年2月、全中と農水省が共催した「第1回環境保全型農業推進コンクール」で、見事大賞に選ばれたのだ。受賞理由は、畜産農家と連携しての堆肥による土作りの推進や、性フェロモン剤を利用した害虫対策など、環境に優しい農業の実践が高く評価されたことによる。

難波組合長は、先輩の藤井組合長と組合員の業績に対しての栄誉だと、とても謙虚に語ってくれた。

有機や無農薬栽培に取り組む農協なら、純農村地帯の営農中心の農協だと思われがちだが、岡山市高松農協は都市近郊の金融事業中心型の農協である。岡山

市内へは13km、車で20分ほどの距離で、岡山市への完全な通勤圏でもある。岡山から総社への道路沿いや駅近くは市街化の波が押し寄せてきている。
有機や無農薬栽培に取り組む農家は、3グループの90戸である。30haの田圃や



上 岡山市高松農協会館の建物には、「学校給食には安全でおいしい有機栽培野菜を!!」の大きな看板が掲げられていた左 難波義太組合長。昨年の組合長就任以前は、近畿農政局で農協検査の仕事に携わっていたという異色の経歴の持ち主

畑で作る作物は、ハウレンソウ、キュウリ、玉ネギなどの野菜に米など。有機栽培に欠かせない堆肥は、20kmほど離れた賀陽町の畜産農家から仕入れている。いまは岡山市高松農協管内には、畜産農家がないのだ。



長

農協が取り組む有機や無農薬栽培の成功事例として、岡山市高松農協には多くの視察者がやってくる。農協関係者以外にも多い。ある時、日銀の岡山支店長もやってきて、「それで、有機や無農薬栽培は儲かるんですか」と質問した。難波組合長は、さすが日銀マンは経済採算性に関心があるのだと苦笑しつつ、「いや、儲けのことを考えていたらこんなことはやっていられません」と答えたり、支店長氏はポカンとしていたという。

「高齢農家に取り組んでもらっていますから、もともと儲けることが目的ではありませんので、何とかやっていけるのです。営農中心の農協でしたらちよつと無理かも知れませんが」とくに手の込んだ作業となる。多品種少量生産は若者には不向きである。この成功事例は、高齢者の生き甲斐に支えられていることは無視できない。

県外にも広がる安全のイメージ

岡山市高松農協が、有機・無農薬栽培のバイオニアになるには、行政や地元経済界の強力な支援も重要な存在だった。経済連や中央会が横を向いていた時、行政では岡山県の長野士郎知事が応援してくれた。

県は国より早く有機無農薬産地事業をスタートさせている。有機・無農薬栽培に関連した組織育成費や灌漑用井戸、防虫ネット、雨よけハウスなどに県費で半額補助を出してくれ、5kg詰めの小売用のパックのデザインに助成金もつけてくれた。有機農産物に対するガイドラインも国に先がけて88年に導入している。

勝手な推測だが、こうした知事の応援は、水戸黄門の「印籠」ではないが、経済連の横槍をかわすのにも絶大な効果があったのではないだろうか。

経済界では、地元の天満屋百貨店が、岡山市高松農協のために、わざわざ有機・無農薬栽培の農産物の専用売場を設けてくれた。いまから20年近くも前のことである。地元スーパーの商品戦略とも合致した。食べ物の安全性を求める消費者ニーズにマッチし、商品の差別化にも

大いに役立ったのだ。
有機や無農薬の取り組みは、農協界よりも外の世界で先に評価され、それが何年かして農協界にフィードバックされてくる図式のようなのである。農政の経験も豊かな難波組合長も、

「このような取り組みは、西南暖地の農業県だからできることです。貧しければ、損を覚悟で有機や無農薬栽培は不可能ですからね」と総括する。

岡山市高松農協は、金融事業でも恵まれている。とかく問題となっていた不良債権がほとんどないのだ。今回の住専処理のゴタゴタでも貯金の流出はなかった。むしろ逆に増えているのだ。組合員から「よい農協」のお墨付をもらったよなものだ。

有機・無農薬栽培の作物は、いまでは天満屋百貨店だけでなく、大阪の阪急百貨店宝塚店でも扱われるようになった。岡山市高松農協のイメージが県外にも浸透しつつあるのだ。ただ悩みと言えば、注文に応じきれないことである。こればかりは急激に増やすことはできそうにない。それと堆肥原料となる家畜糞尿を確保することである。

農協トップは気づいていないかも知れないが、採算を度外視したかに見える岡山市高松農協の有機・無農薬栽培への取り組みは、たしかにメリットのあることなのである。県内外の消費者に「岡山市高松農協II安全な農産物を作る「よい農協」」のイメージが定着するなど、有形無形のメリットを与えていることだけは間違いない。